

「信仰による救いを」

エゼキエル書 第37章 11節～14節
マタイによる福音書 第9章 18節～26節

説教 岡村 恒牧師

「あなたの信仰があなたを救ったのです」(22節)。この日、主イエスの口から響いたこの言葉は、今日でも、主の教会で礼拝が行われるたびに世界中で聞かれています。

今朝の聖書箇所には、二つの奇跡物語が語られていますが、実は、一つのこと集中しています。主イエスとはいったいどういうお方か、そしてこのお方による私たちの救いとは何か。これは一つのことなのです。16世紀の宗教改革以来、プロテスタント教会では、〈信仰のみ〉によって救われるという聖書の言葉を、繰り返し確認しながら歩んできました。ただ主イエスを信じる信仰だけが、私たちを救い、私たちに希望を与えるのです。

この日、自分の人生をすっかり根底から変えられてしまった一人の女性と、死んでしまった娘をよみがえらせて頂き、絶望の底から喜びを与えられた一人の父親が登場します。「わたしの娘がただ今死にました」。(18節)と記されています。やがて家に帰り着くと、そこは深い悲しみと絶望に包まれています。主イエスが向かった場所は、一切の希望が失われた場所でした。

「わたしの娘が今死にました」という言葉は、深い絶望を言い表しています。さらにこの時、やはり深い絶望を抱えた女性が登場します。長い間の闘病生活の末、全財産とすべての気力を使い果たした女性です。出血のために〈汚れた者〉とされ、神殿に行って神に祈ることもできない生活でした。神に見捨てられとしか思えない苦しい生活を12年間も送ってきました。人々との交わりに復帰するために、あらゆる手立てを尽くしながら、人間の悪意に翻弄されてきました。この深い絶望の中で、主イエスに出会います。このお方の衣のふさに触れることさえできたら、この絶望から解放されるかも知れない、というかすかな希望を抱いてやって来たのです。

他の福音書では、人混みにまぎれて後ろからこっそりと主の衣に触れたと記されています。主イエスはこの女性の思いを誰よりもご存知でした。そして振り向いて「娘よ、しっかりしなさい」(22節)と言われました。どのようにして神との関係を回復して、神の祝福を受けて生きたら良いか、ということをお教える時の律法学者の語り口です。「しっかりしなさい」という言葉は「慰めを得なさい」、「神の平和が与えられるように」という意味です。そしてこの言葉を

主イエスの口から聞いたその時、この女性は癒され、それまでの全ての重荷から解放されました。12年間、この女性を苦しめてきた絶望、神に対する疑いと問いから、解放されたのです。

誰でも、主イエスに出会い、その言葉を聞くなら、大きな癒しと慰め、平和を手に入れます。神に見捨てられた存在だと思ってきた自分自身が、神に愛され、神の祝福を受ける存在であることを知るようになるからです。

肉体の痛みや、精神の苦しみから解放される以上の、本当の救いを主イエスはお与え下さい。死んでしまった者のために、大声で叫び、笛を吹いて悲しみを表現する人々があふれています。世界全体を絶望が覆っています。しかし主イエスは、「少女は死んだのではない。眠っているだけである」(24節)と宣言なさいます。死の絶望の前で語られたこの言葉は、そこにいた多くの人々にとっては愚かな言葉でした。しかし世界中のキリスト教会は、主の日(日曜日)ごとにこの言葉を聞き続けています。神は、主イエスを墓から引き上げて下さり、主イエスは今も生きておられます。だから私たちは、終わりの日の復活を信じて歩むのです。

すべての人間が絶望し、何の喜びをも見いだすことができない時、主イエスはお自身の命を犠牲にして神の愛をお示しになりました。神を信じる者は、死でさえも「眠っているだけ」と確信して生きるのです。あの日、主イエスが会堂司の娘を生き返らせ、死がもはや私たちを神から引き離すことができないことをお見せになりました。さらに、ご自身が墓から出て来られて、私たちすべての者の復活が確実であることをお見せ下さいました。

終わりの日の復活を信じるキリスト教会は、今、レント(受難節)という期間を過ごしています。主イエスがこの私のために、私たちのために苦しみと痛みとを負い、命を与え尽くして下さいたことに思いを馳せ、そこまで深い自分自身の罪に目を留めます。しかしそれは同時に、主イエスがお与え下さる本当の命を受けとめながら歩むことを意味します。終わりの日を待ち望み、主に期待する歩みなのです。たとえ死んでも滅びることがなく、さばかれることがない、という赦しの約束を、私たちは聞き取り、信じ、希望を抱いて歩むのです。

(記 岡村 恒)